

2008年10月23日パネル討論

テーマ：障害当事者によるニーズ紹介～工学に期待すること、意見交換会～

概要：肢体不自由当事者の立場から話題提供をしていただくパネル討論

◆ 麩澤 孝 氏（有限会社セカンドステージ，日本リハビリテーション工学協会理事）

今日は「全国頸椎損傷者連絡会」の立場から発言する。

1983年に交通事故で頸椎損傷になった。

1992年に施設に入所。1997年から東京都内で自立生活。

首から下が完全麻痺。あごで操作する電動車いすを使用。

一般的な頸椎損傷について。スピード時代の副産物。増加中。

四肢機能、知覚、呼吸器機能、体温調節、排泄に後遺障害。

かつては頸椎損傷者が社会参加することなど考えられなかった。

1973年に連絡会の前身を設立。現在は全国に10支部、750人の会員。機関誌が好評。

自立や社会参加に関する状況はよくなりつつあるが、情報やリハビリテーション環境などについて地方と東京圏の格差が大きい。

積極的に自分らしい生活が可能な社会を目指して。

国際福祉機器展などで見ると機器の種類は増えた。選択肢が増えたことは歓迎だが、自分にあつたものを選ぶのが困難。

当事者の役割として情報発信が必要。

ユーザの生の声を技術者に伝えて連携したい。

2008年3月に日本リハ工学協会と合同でシンポジウムを開催。

情報の格差をテーマにした。遠方からも参加。

開発者が当事者の生活やニーズをどこまでリアルに想像できるか？

当事者の生活を知って欲しい。対等な立場で。気楽に一緒にやろう。

「作りましたから使ってください」ではなく「どういうニーズがあるか？」から。

話題提供として、周囲の利便から障害当事者が取り残される現実。

例えば改札では介助者と自分の割引切符(子供切符2枚)を買う必要がある。SuicaやPasmoなどICカードの利便性を享受できない。

「みどりの窓口」も車いすスペースの予約には使えない。ケータイで新幹線を予約できる時代に、車いすユーザは電話して何十分も待たなくてはいけない。

ATMの指認証を使うのが困難で、ヘルパーさんに手袋を外してもらって指をつけてもらう、そもそも車いすでATMに入れない、など。

便利になるのは歓迎だが、みんなが同じシステムを！

2009年3月にも関西で合同シンポジウムを開催する。

◆ 今福 義明 氏（ACCESS-JAPAN代表，DPI 常任委員交通問題担当，アクセス・マニア）

テーマは「ローテク技術と交通バリアフリー」。

自分はリユーマチだがほとんど外に出かけている。外出するほうが気分がよい。

2000年に交通バリアフリー法。2006年にバリアフリー新法。2010年までの数値目標。

一日乗降客5000人以上の駅などのバリアフリー化を目標に。

ノンステップバスの普及促進。車いすでの乗降を可能に。

現在東京では80パーセントが低床バス。

エレベーター、エスカレーター、点字誘導ブロック、簡易リフト、誰でもトイレ、・・・

ホームと車両の段差と隙間が問題。さまざまな電車やバスのスロープを紹介。

ケーブルカーの斜めのスロープが課題。

本当は台形スロープを使うべき場所で、既存のものを使っているなど。

社会参加に携帯型スロープという「ローテク」が重要な役割を果たす。

ある自助具を30年使っている。13機能の「万能棒」。眼鏡を外したり缶ジュースを飲んだりマイクを持ったりさまざまに役立っている。

高度な機能とローテクの両方が障害者の生活を支えている。

◆小山万里子様（ポリオの会）

今日は3人（叶谷 昇さん、小山万里子さん、笹谷 芳夫さん）で発言する。

ポリオの会は1995年に設立。日本全国とアメリカ・イギリスで約520人。会報は医療機関なども含めて1300通以上送付。医療機関にポリオとPPS（ポストポリオ症候群）を知ってもらうために。

模擬患者、モニターなどの活動。車いすの試乗。

症状が全身に関係する。

技術に期待すること。

痛みや疲労の計測、リハビリ効果の検証。呼吸筋の機能評価。

補装具のフィッティング、圧力分布の計測。

歩行計測。楽に歩くにはどうしたらよいか。杖の効果が顕著。

車いす自体の機能。横移動できる車いす。段差や階段。下り坂。

車いすの操作。要求が多種多様。手指中心のインターフェースは使用しにくい。

音は健聴を前提にしている。

連携協力を呼びかけている。

駐車禁止除外標識交付対象から下肢障害者が切捨てられる。署名運動中。

◆叶谷 昇氏（ポリオの会）

自分が車いすで持ち歩く荷物はたくさんある。

1段か2段だけの階段のために杖も必要。

車いすから降りる動作を実演。前後の荷物のバランスを意識しないと転倒する。

自分は左足に力が入らない。

他の登壇者に肢装具を見せてもらう。

これで皆さん2級。

1種なら介護者もJR乗車券が半額。2種は100キロから。

2種が駐車禁止除外票から外されそう。

自分は高いところに手が届かない。

銀行ATMの角度と高さ。画面が見えない。

さわっても反応しない。押すのかさわるのか。手袋で使えない。

ATMを介護者に任せる？暗証番号を教えるのか？

クレジットカードで買い物の際に暗証番号を押すカールコードの装置が望ましい。

低いATMはできたが、下部に車いすが入らないので近づけない。

ネットバンクは便利だがPCから現金が出てこない。

Suicaにチャージして使う。モバイルSuicaに期待。

せっかくの技術なので当事者の問題を解決して欲しい。

◆フロアとの意見交換

新技術は使いづらい。返品できない。価格が高い。みんな改造して使うので試用できない。

乗って見ないとわからない車いす。

モジュール化、カスタマイズ対応。

動きはあるが、メーカー間の互換性が問題。

例えば車いすの前輪を変えるだけで大きく改善されたりする。

1時間座って見ないとクッションの様子はわからない。モニターできることが重要。

オプションを自分で自由に選びたい。ユーザの目線で改造してくれる業者が少ない。

交通機関の携帯スロープ。当事者に聞いてくれれば判断できる。ユーザに関与させるべき。

オーダーメイドの松葉杖をいつまでも作ってもらいたい。

杖ユーザーへのバリアフリーがおきざりにされている。

工学者は流行に流されている。

アルミより木の杖が本当は使いやすい。

ローテクの要素もハイテクの要素もある。

研究者は業績とニーズの両立で悩んでいる。

工学は大量生産のため。アジャストは技能。

杖やリーチャーについては木工所に相談できる。デザイナーが入って開発をすると面白く

なる。

作るものの幅が大きいという悩み。小さなマーケットを大きくするために、UD、共用品という方向性を。

ユーザの話を聞いて欲しい。「一緒に作りましょう」という立場で。

ニーズは変化する。当事者も自覚していない。だんだん定まっていく。

ユーザの意見でメーカーも変わる。

スロープは共用品。つければ自販機ベンダーの人も喜ぶ。

たった1人のニーズがみんなのためになる。

(以上)